

川辺の生活世界 サクラマス漁をめぐる越後荒川の現在

出口晶子

The World of Riverside Livelihood

はじめに

- ①マスがよくとれたころ—一九〇〇年代初頭
- ②マスがとれなくなる—一九〇〇年代なかば以降
- ③サクラマス遊漁元年—一〇〇四年
- ④結び

【論文概要】

本論文は、新潟県北部の荒川をフィールドに、一九九〇年代初頭以降に生じたサクラマス漁をめぐる諸変化をとり、今日の川と人のありかたを論じている。海で過ごしたサクラマスは、秋の産卵にさきだつて一月ころより徐々に川へのぼりだし、春にその遡上ピークをもつていている。川へあがつた春マスは身に脂がのり、しかも川の水を飲んで一層おいしくなるとされ、海で漁獲されるものよりはるかに高値で取引されてきた。

川でのマス漁は刺網漁で、流域住民で構成される漁業協同組合員のなかから毎年二、五名程度が行使料を払ってこれに従事する。簡単にはそれにくく、川一番の高級魚であるサクラマスにたいし、川漁師はその生態にかかる民俗知識を蓄積し、また淀みをえるための人工的な構造物（アーテ）に工夫をこらすなど、互いに競い合つてマスとりの技能を磨いている。他方、組合ではマス漁をめぐつて生じる上下流域の不平等を緩和し、ゆきすぎた漁法を禁止するなどし、流域内の調整を図ってきた。

サクラマスは、シロサケにくらべて遡上から産卵までの間、川に長く棲息し、孵化

したのちも一一二年川で過ごすという生態をもつ。つまり河川環境の影響をうけやすいことから、資源は著しく減少しており、かつ人工増殖が難しい魚である。その点、資源増殖に早くから着手し、春期の刺網漁を継続させてきた荒川は、サクラマスの多くとれる川として知られ、サケ一種に限定されない環境利用の多様性が当地の文化的特徴となっている。

しかしながら、近年は漁獲の減少、マスの小形化といった変化が生じるとともに、漁業権の見直しがなされた一〇〇四年には、サクラマスの遊漁（釣り）が解禁され、二〇〇人もの釣人が参画する事態を迎えた。「生活の漁」に「遊びの漁」が加わり、一気に後者の比重が高まるなか、遊漁者の受容は、上下流域の対立の新たな焦点となりつつある。今後、流域の再編が進むとしても、川とかかわり続けてきた川漁師たちの技能や経験を再認識し、遊漁一本に走らない環境利用の多様性を保証していく取り組みが求められる。